

広告 企画・制作／
読売新聞社広告局



野口 健

登山家

1973年米ボストン生まれ。植村直己氏の著書に感銘を受けて高校時代に登山を始める。亜細亜大学時代の99年に3度目の挑戦でエベレスト登頂に成功。当時の世界7大陸最高峰登頂の最年少記録を25歳で樹立。エベレストや富士山での清掃登山や、「野口健環境学校」を主宰、人材育成にも取り組んでいる。



清風中学校・高等学校(大阪市天王寺区)は仏教に基づく人間教育を進める中高一貫の私立男子校です。創設者の系譜を受け継ぎ、チベット研究者としても知られる平岡宏一校長と、環境問題に取り組む中で自らの体験を若者らに発信している登山家の野口健さんが対談。次代を担う人材教育の大切さや、社会貢献活動に果たす若者の役割などを話し合いました。その模様を3回に分けて紹介します。

清風学園 スペシャル対談 vol.1

現代に 求められる教育

若者への関わりから感じることは

野口 2000年以降、エベレストや富士山での清掃登山を続けるかわら、体験を伴う知識を持って環境活動を担える人材を育てる「野口健環境学校」を主宰するなど、様々な環境活動に取り組んでいます。そこには積極的に参加してくれる学生が多く、高校生も参加してくれています。今の子どもたちは何かきっかけがあれば、「わっ」と参加したがる。参加してみても、「こんな反響があるのだ」と前向きに受け止めています。

平岡 教育が難しい時代です。欲望をかき立てる情報も、父母も知らないところで簡単に手に入り、足をすくわれる条件があります。同じ教育をやっているとはいえないと感じています。自分に大切なものを、上手に取捨選択することを教える必要がある。ただし、「今の若者はだめ」ということは絶対にありませぬ。今の若者には、頭ごなしに言うとかだめだけれども、きちんと向き合って納得できるように話せば、学ぶことができます。

それだけに、ますます教育の重要性が高まる

平岡 社会人になるとクレームを受けて、仕事から外されることはあっても、「こを改めたほうが人間的に延びる」と言ってもらえることはあまりない。人から怒ってもらえるのは、学生だけの特権です。ありのまま「よいのはお釈迦様だけで、人

は自分の至らなさに向き合って、学ばなければならぬ。生徒を怒るのにはエネルギーが必要ですが、それを正しく受け止めるような子どもを育てたい。

野口 私は高校時代に停学処分を受けるなど、いわゆる不良生徒で、先方は厳しかったですね。大学で7大陸最高峰登頂の冒険に取り組んでいた時も、周囲から怒られることがたくさんありました。本当にいろいろな大人が怒ってくれました。私はあの時期、世間からの批判や悪口をその都度、日記に書いていました。1週間後に読み返すと、けっこう納得できる指摘もある。怒られると「瞬、「チクショー」と思うのですが、どこかうれい自分がいます。「俺はまだ、見捨てられていない」と思えるからです。

平岡 本校では宗教教育が基本にあります。特定の宗教を学ぶのではなく、大切なのは「利他」と教えています。どうやって人の役に立てるか。そのためにもどうやって自分を高めていけるのかを考える。今の時代、効率的にものごとを進めたがる。しかし、地道に努力することは、泥臭いことではなくても、尊いことなのです。般若心経の冒頭には、「核心に触れるまで努力すること」が書かれています。変化の激しい時代に、環境が変わる度に心が折れてはいけません。与えられたどんな環境の中でも、ファイティングポーズを取れる、努力を続けられる強い心を育てるのが、宗教教育だと思います。



平岡 宏一

清風中学校・高等学校校長

1961年大阪市生まれ。早稲田大学第一文学部卒。高野山大学大学院博士課程単位取得(密教学専攻)。2年間、インドに修学してチベット仏教を学んだ。清風中学校・高等学校で社会科教諭、副校長を経て、2011年から現職。チベット仏教に関する著書多数。